

2章 宮城県環境の現状

1節 地域の概況

私たちが暮らす宮城県は、東北地方の南東部に位置し、西部、東部、南部の山地・山脈と、山々の周縁から平野にかけて広がる里地里山、平野を流れる名取川や北上川、阿武隈川などの河川、伊豆沼・内沼などの湖沼、砂浜海岸、リアス式海岸からなる長距離の海岸線からなっており、多種多様な動植物が生息・生育しています。

気候は、太平洋岸型の温帯性湿潤気候に属していますが、平野が広がる東部と山地が多い西部では異なった特性がみられます。東部は、太平洋に面しているため海風が入りやすく、一年を通じて比較的穏やかな気候となっています。一方、奥羽山脈の裾野に当たる西部は、夏の暑さは厳しくありませんが、冬は季節風の影響を受けて降雪量が多くなります。



図 5：宮城県の地勢図

画像出典：宮城県環境基本計画（H28）

2節 宮城県の環境の現状と課題

豊かな自然の下、私たちは多くの恵みを享受しながら暮らしてきました。しかし、近年の資源・エネルギーを大量に消費するライフスタイルや社会経済活動の変化により、生活の利便性は向上したものの、私たちの生活が自然環境に与える負荷は増大しています。

本県では、そのような状況を踏まえ、「低炭素社会の形成」、「循環型社会の形成」、「自然共生社会の形成」及び「安全で良好な生活環境の確保」に向け様々な取組を進めてきました。

しかし、地球温暖化問題などが深刻化するなか、温室効果ガス排出量の更なる削減や再生可能エネルギーの利用促進の取組が早急に求められる状況にあります。

一般廃棄物・産業廃棄物については、依然として排出量が多い状況であることから一層の削減に取り組んでいくとともに、リサイクル率を上げていくことが求められます。

良好な自然環境が維持されていますが、少子高齢化の進行と第一次産業従事者の減少など、社会状況の変化により森林や農用地の荒廃した地域では、里地里山の多様な環境が維持困難となっているほか、生息域が拡大しているイノシシ、ニホンジカなどによる農作物等の被害が深刻化しています。

大気や水質などの生活環境についてはおおむね安全で良好な生活環境が維持されていますが、光化学オキシダントや閉鎖性水域における水質、騒音など、一部で環境基準を超過しているなどの課題があります。

宮城県の環境の現状と課題のポイント

低炭素社会

○温室効果ガスの排出量については、平成27年度に、東日本大震災後初めて減少に転じました。再生可能エネルギーの導入量は増加基調にあり、今後もこの傾向を維持していく必要があります。

循環型社会

○一般廃棄物・産業廃棄物ともに、東日本大震災前に比べて依然として排出量が多い状況です。排出量を削減していくとともに、リサイクル率を高めていくことが必要です。

自然共生社会

○環境保全地域の指定や適切な指導等により、おおむね豊かで良好な自然環境が維持されていますが、近年は有害鳥獣の生息域が拡大し、農作物等の被害が拡大しています。

生活環境

○おおむね良好な生活環境が維持されていますが、光化学オキシダントや閉鎖性水域の水質、騒音など、一部では環境基準が達成されていない状況にあります。

3節 新型コロナウイルス感染症への対応

1 これまでの経過と本県の影響

新型コロナウイルス感染症は、世界中で猛威を振るい、国内でも多くの方々が罹患され、尊い命が奪われる事態となりました。また、国内外の経済に甚大な影響をもたらしており、この先の見通しも極めて厳しい状況が続く、まさに国難とも言うべき状況となりました。

県内においては、外出自粛や休業要請等に伴う消費の低迷をはじめとして地域経済に幅広く影響が現れており、これらの影響の長期化による景気の低迷が懸念されます。

県民生活においては、雇用や余暇の過ごし方、教育、地域の在り方など、幅広い分野でライフスタイルが変化し、企業においても、事業継続に向けた新たな動きや、テレワークなど多様な働き方が広まりつつあります。

2 新型コロナウイルス感染症対策を経ての今後の対応

県は、より一層の感染拡大防止、感染収束に向けた対応はもちろんのこと、新型コロナウイルス感染症対策を経て新たに取り入れられた、人と人の距離を確保するなど「新しい生活様式」の実践や、デジタルシフトなど、今後、長きにわたって取り組んでいき、今後の感染症への備えや持続可能な未来づくりにつなげていく必要があります。

